

さりげなく あいさつ

副校長 細井 宏一

ある休み時間のとき、私は教務室前で子どもたちの遊びの様子を見ていた。すると、低学年の女の子が私を見つけて、「先生見て見て…」とこちらにやってこようとしていた。

一方で、児童玄関から、低学年の男の子が校庭に元気に走って出て行こうとしていたのも見えた。丁度、互いに直角な方向であったので、少し嫌な予感がしたが、やはり両者はぶつかってしまった。

女の子の方は転んでしまった。別にどちらも悪くない。どちらも悪気もない。でも、ぶつかってしまった。

どうするのかわかっているが、転んでしまった方の女の子は、やや泣きべそになっていた。もう一方の男の子は、痛そうではあったが、特に怪我の様子は無く、少し留まってはいたものの、そのまま走って行こうとしていた。お互い全く会話を交わさずに…。

「あれっ、どうして、互いに何も言わないのだろう？」

ちょっとでも、お互いに「ごめんね」の一言が言えればどんなにか違うのに…。

私は、走り去ろうとする子どもに「ちょっと待ちましょう」と呼び止めた。

別に叱るのではない。ただ、「何か一言お互いにあるのではないですか。」

と話をした。だが、お互いこのようにしても何も言わない。

「どうして、ゴメンね」の一言が、とっさにさっと言えないのであろうか。

最近、子どもたちがこのような一言が、さっとなかなか言えないケースによく遭遇する。

例えば、駅でもわざとではなくても、通勤客の方に、ランドセルなどぶつかってしまうときがある。子どもは背が小さい。視野も狭いので、周りが見えないこともある。であるからこそ、そのようなときに、「すみません」と一言がすぐに気持ちよく言えれば、ぶつかられた方も、

「まあ、わざとではないのだろう。子どもだし…」

とそれほど嫌な気持ちをしないですむ。ところが、何も言わないで、無視してしまうような感じだと、

「何だあの子は。どこの学校だ。どういう教育をしているんだ。親も親だ！」

となってしまう。

さりげない一言。さっと言えればどれだけかいいのに…。

「謝ることができない子」というのがときどきある。自分の非を認めない。

今回の場合は、そういったことではなく、パッと出なかつただけなのかもしれないが、時々そのような子どもに出会うこともあり、寂しく感じることもある。挨拶や返事の大切さを言っているが、子どもたちは、決まり切ったときはよい挨拶ができる。先生の前ではよい挨拶をする。みんなで一緒に「おはようございます」とか「いただきます」とか。

でも、このようなとっさの時に、自然に、自分から言えるといいのであるが…。

わざとではなくても、人に迷惑をかけたときに、さっと言われる。そういうことも大切にしたいものである。

まずは、大人から見本を見せていきたいものである。